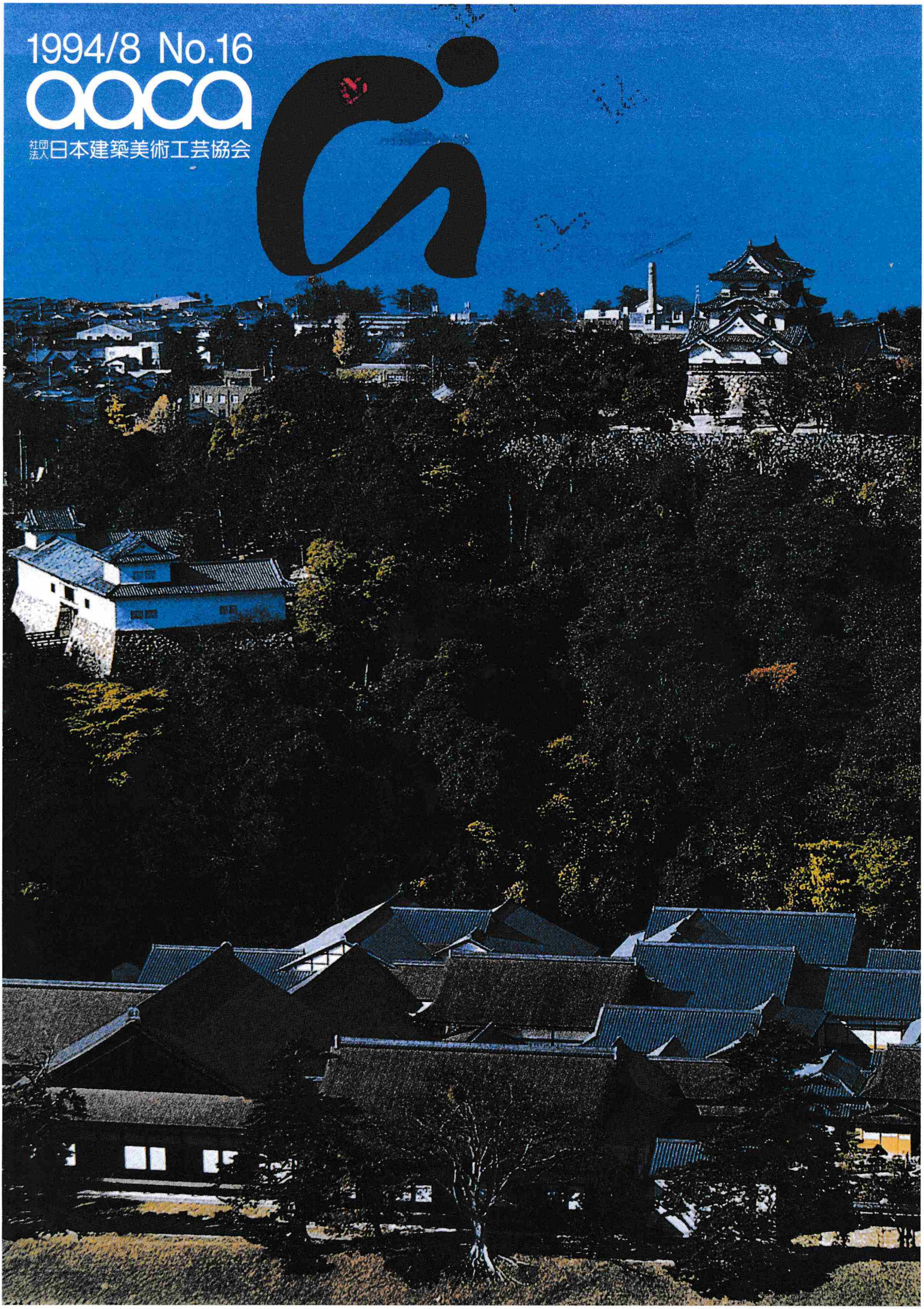
1994/8 No.16

aaca

社団法人日本建築美術工芸協会



CONTENTS

'94滋賀・彦根シンポジウム
あいさつ…… 1
講演…… 3
パネルディスカッション…… 3
'94滋賀・彦根シンポジウム開催について
…… 6
'94滋賀・彦根シンポジウムと信楽の旅
「温故知新」…… 6
'94滋賀・彦根シンポジウムと信楽の旅
＜研修記＞…… 7
時代の華一輪
岩田糸子…… 8
長谷川栄…… 9
アピアランス（会員作品紹介）……10
AACAトーク
矢作彩子……11
川村沙智子……12
TOPICS……14

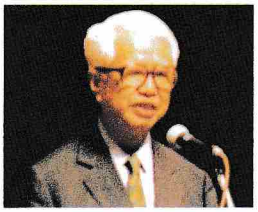
'94滋賀・彦根シンポジウム――「水と景観」

日時　平成6年5月13日㈮
　　午後1時～5時
場所　彦根市民会館大ホール

あいさつ

司会　皆様お待たせいたしました。本日は社団法人 日本建築美術工芸協会の主催によります'94滋賀・彦根シンポジウムにご出席いただきありがとうございます。ただいまよりシンポジウムを開催させていただきます。私は本日の司会を務めます滋賀県企画部地域振興室長の大貫でございます。よろしくお願いいたします。（拍手）

開会にあたりまして社団法人 日本建築美術工芸協会 芦原義信会長よりご挨拶を申し上げます。



社団法人
日本建築美術
工芸協会会長
芦 原 義 信

本日は皆様大変お忙しい中、当日本建築美術工芸協会のシンポジウムにご臨席くださいまして誠にありがとうございました。この日本建築美術工芸協会というのは、建築家や美術家や工芸家が集まりまして、景観やまち並みを少しでもよくしようという協会でございます。きょうは文化庁内田長官も後ほどお見えくださいまして、この協会の進路ますます盛んになるように応援してくださっております。

先般、静岡県でこのシンポジウムを行いましたとき、「富士山と景観」というのはどうかということでありまして、昨年は金沢でやりまして、これは「文化と景観」そういたしますと今度は滋賀県でぜひお願いしたいということで、「水と景観」という問題でありまして、本日ご臨席の稲葉知事さんはじめ、中島市長さんにもお願いいたしまして、滋賀県彦根市でこのシンポジウムを開催することができましたことを大変我々うれしく思っている次第でございます。

またきょうはお忙しい中、パネリストの皆様もお見えくださっております。後ほどまたいろいろな意見が出てくると思います。今日は皆さん論客でありますので、また皆さんのほうからも厳しいご質問等が出るのを期待しております。皆様ご静聴をお願いいたしますとともに、滋賀県、彦根市のますますのご繁栄を祈る次第でございます。（拍手）

司会　どうもありがとうございました。この'94滋賀・彦根シンポジウムの開催にあたりましては、多くの方々のご協力をいただいておりますのでご紹介させていただきます。

滋賀県及び彦根市には共催としてご支援をいただいております。また文化庁、(社)日本建築学会、(社)新日本建築家協会近畿支部、(社)滋賀県建築士会、(社)滋賀県建築士事務所協会、(社)滋賀県建築設計家協会、(財)日本造園修景協会滋賀県支部、(社)滋賀県測量設計技術協会、朝日新聞社大津支局、京都新聞滋賀本社、産経新聞社大津支局、中日新聞社、日刊工業新聞社滋賀支局、日本経済新聞社、毎日新聞社大津支局、読売新聞大阪本社、共同通信社大津支局、時事通信社大津支局、近畿放送、日本放送協会大津放送局、びわこ放送、滋賀報知新聞社、日刊滋賀新聞社、以上23の団体のご支援をいただいております。

ここでご来賓の稲葉稔滋賀県知事よりご挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

滋賀県知事
稲 葉 稔 氏

国宝彦根城に美しい青葉のよく似合う季節がやってまいりました。水と緑あふれる「湖と歴史の国」滋賀県におきまして、景観に関心をお持ちのたくさんの方々が全国からおいでいただきまして、「水と景観」をテーマに'94滋賀・彦根シンポジウムが開催されるということは、誠に意義の深いことでございまして、私どもといたしましても大変うれしく思っておるところでございます。

ご承知のとおり当滋賀県は、日本最大の湖であります琵琶湖とそれを取り巻く緑深い山々などの 美しい自然と豊かな歴史、文化に恵まれておりまして、古くから人物、情報の行き交う水陸交通の要衝として発展してまいりました。そしてその中で営々と営まれてきた人々の生活が一体となって潤いのある滋賀ならではの風景や、ふるさとの町や村の落ち着いたたたずまいというのが形づけられてきたのでございます。

しかしながら急激な都市化の進展と、生活様式や生産活動の近代化に伴いまして、琵琶湖にも赤潮が発生し、水質が悪

化するとともに、ふるさとの美しい風景も徐々に変貌してまいりました。この滋賀の地で先人によって育まれてまいりましたかけがえのない財産が、わずかの期間に急速に失われていくことに、私どもは大変な危機感を覚えたのでございます。

ともすれば経済性や便利性を追求するあまり、本来大切にすべきものを見失っているのではないか、これまでの生活観への反省に立って、本県ではもう一度あおい琵琶湖を取り戻そうではないか、そういうことで家庭用有リン洗剤の規制をはじめ、琵琶湖の水質保全のために県民が一体となって取り組んでまいりました。

さらにこうした経験を生かしまして、世界湖沼環境会議の開催でありますとか、財団法人国際湖沼環境委員会の設立支援を行うなど、全国的にも一環境先進県とは申しませんけれども、環境熱心県というように評価をいただくまでになってきたのでございます。そして平成４年度には、琵琶湖とその周辺のヨシ群落の保全と散在性ごみの防止のための条例をそれぞれ規定し、琵琶湖の水質保全と水辺の環境美化を一層推進するとともに、昨年６月には琵琶湖が「ラムサール条約」の登録湿地として認められまして、そういったこともありまして「自然と人との共生」を基本に、自然の生態系の営みに配慮した施策を積極的に展開しているところでございます。

また景観の問題につきましても、自然と歴史とまち並みが一体となって形作っている風格ある湖国の風景を大切に守り育てていく、そして調和のとれた都市景観を創造することを目的といたしまして、昭和60年に全国に先がけまして、「ふるさと滋賀の風景を守り育てる条例」というものを制定、施行し、まもなく10年目の節目を迎えようとしております。この間、琵琶湖周辺や主要な道路、河川沿いの景観の優れた地域等を指定いたしまして、建物や構作物に対する指導助言を行ってまいりましたし、自治会や町内会での近隣景観形成協定による自主的な景観形成のための活動への支援を行うことを通じまして、ふるさとの風景が持つ多面的な価値に対する県民の認識も次第に高まってきているものと思っているところでございます。

どうか本日のシンポジウムが、美しい景観づくりにとりまして貴重な発信源となり、琵琶湖に投げられた一石から生ずる波紋のように、その輪が県内はもとより全国に広まって、今後さまざまな地域において美しく、親しみやすく、しかも環境にやさしいまちづくりが展開されることを心から念願するものでございます。

最後になりましたが、このシンポジウムを主催いただきました社団法人日本建築美術工芸協会並びにご後援をいただきました諸団体の皆様に感謝を申し上げますとともに、本日お集まりいただきました皆様方のますますのご活躍を心から祈念いたしまして挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

司会　どうもありがとうございました。

それでは次に、地元彦根市の中島一市長からご挨拶をいただきたいと思います。

彦根市長
中　島　一　氏

彦根市は10余万人の人口を数え、滋賀県東北部中核都市として発展してまいりました。

市街地には、国宝彦根城を中心として近世城下町の面影を残す町並みが見られ、また京阪神の通勤圏として発展が進み、新たな住宅団地が点在し、水辺はマリンスポーツのメッカとして、鳥人間コンテストやトライアスロンなどの大きなスポーツイベントの舞台としても知られる新旧の両面をもった水と緑の豊かな、歴史と文化の香りただよう地方都市であります。

彦根市では、都市景観行政を市の重要施策のひとつとして推進しており、市民の景観に対する意識調査でも、都市空間をよりうるおいのある個性的、魅力的なものとして整備していくことを通じて、真の豊かさを実感できるまちづくりを進めることが重要な課題であるとの意見が多数を占めております。

景観についての市民意識が高揚しつつある中で、現在本市では、都市計画道路の整備事業と併せ住民とともに〝彦根ルネッサンス〟と名うちまちなみ景観の再生を目指す「本町夢京橋地区」、新しい都市空間の創造により、魅力ある都市景観形成を目指す「巡礼街道ベルロード地区」など、住民と行政が一体となり景観形成を推進しております。また、平成７年度において都市景観条例を制定することを目指し、現在その準備を進めているところであります。

このような時機に（社）日本建築美術工芸協会の主催で、都市景観や琵琶湖を取り巻く様々な環境について、各分野の識者の皆様にお集まりいただきシンポジウムを開催いただきましたことは、今後彦根らしい魅力あるまちを造り、人と共存できる都市景観を創造していく上で大変有意義なものでございました。シンポジウムでのご示唆、ご提言を施策推進していくために、大いに参考にさせていただきたいと存じます。

末筆ではございますが、地域特性をテーマにしたこの様な景観シンポジウムが今後も全国各地で開催されますことをご期待いたしますとともに、日本建築美術工芸協会のますますのご発展をお祈り申し上げまして関係各位へのお礼とさせていただきます。

パネルディスカッション

司　会	aaca副会長・京大教授 内井昭蔵氏	京大名誉教授 西川幸治氏
パネリスト	東京芸大教授 澄川喜一氏	建設省土木研究所環境部緑化生態研究室長 半田真理子氏
	作家 高城修三氏	京大名誉教授 日高敏隆氏

講演

文化庁長官
内田　弘保氏

歴史と文化と風光に恵まれたここ彦根市で、シンポジウムが開催されたことは、大変意義深く、素晴らしいことと思っている。有益で示唆に富む議論は、私たちにとっても非常に参考となった。その後で私の講演ということなので、話すことがなくなってしまった。そこで文化庁のPRをこの場を借りて、させていただきたい。

これからの活動は〝守り〟から〝攻め〟に

文化庁ができたのは昭和43年のこと。昨年25周年を迎えたまだ若い官庁で予算も厳しいが、文化に対して多くの国民のみなさんが応援してくれていることが、われわれの仕事の励みとなっている。

現在われわれの手掛けている仕事は、大きく分けると、①古い伝統的な文化（文化財）を守る②現代芸術の創造についての支援③地域文化の振興④芸術文化の国際交流について――の四つ。この中には、現在建築中の（仮称）第二国立劇場や高校生の文化芸術活動に対する支援など多くのプログラムが組み込まれており、それぞれに成果を上げている。

文化庁の組織自体も、新たに地域文化振興課を設置し、バックアップ体制の充実を図った。また、国立博物館・美術館にはいろいろなコレクションがあり、これを全国で積極的に展示していこうということになった。質の高い展覧会ができると考えている。

文化庁といえば「守る」というイメージが先行していた感があったが、これからはドンドン攻めることも必要だと思っている。（文化庁は）今の制度、活動に決して甘んじてはいない、これからの時代に向かって皆さんと一緒に考え、活動していきたい。

パネルディスカッション

いかに水とかかわって生きてきたのか

司会：内井　昭蔵氏

このシンポジウムは1989年に当会発足以来、これまで5回にわたって、各県、市の協力を得て開催してきた。回を重ねるごとに充実し、多くの方々の参加をいただいている。

本日の「水と景観」というテーマ。景観にとって水は欠くことのできない重要な要素であることはいうまでもない。また、水は私たちの生活に深くかかわり、人間を始め、地球上の動植物が暮らすためになくてはならないもの。この本質的な部分を認識し、私たちはこれまでいかに水とかかわって生きてきたかということについて「水と都市」「水と文化」など幅広い分野で議論していただきたい。

水との関係が今後の街づくりに重要

パネリスト：澄川　喜一氏

滋賀県とは彫刻を通じて大変深いつながりがある。湖北に平安時代に作られた向源寺（渡岸寺）の十一面観音があり、これは天台仏教屈指の名作だと思っている。美術大学にいる関係で、学生が3年になると、日本の歴史の勉強を16日間、寝食を共にして学生たちと京都、奈良の辺りを訪ねる。そのときに最初に来るのが向源寺の十一面観音。檜の一木（いちぼく）づくりで非常に趣がある彫刻だ。

この十一面観音から、ぐっと時代が下がって、上野の西郷隆盛の像について、少し話したい。

この作品は、われわれの先輩で高村光太郎の父親でもある高村光雲先生が作ったもの。写真もなく、ほかに手掛かりになるような資料も少なかったため、創作時には、相当苦労されたときいている。だから、完成し、遺族の方々も交えた除幕式では、本当の西郷さんではないといわれたそうだ。

考えてみると、彫刻には歴史を記念する性格のものもあれば、道祖神のような道標のような性格のものもあるのではないか。道祖神のようなものというのは、手で触ってもいい、何となく親しみのわいてくるようなもの、そのまちに適した、環境を生かすようなもの。現在まちづくりで作られている多くの彫刻は、道祖神的なものが多いと感じている。

彫刻と水というテーマからはこじつけだと思うかもしれないが、私自身、水を彫刻で使ったことがあるし、水自体で素晴らしい彫刻を作っている方もいる。体を洗うような水と人との関係が、彫刻の中でも次第に取り入れられてきた。

水との関係をいかに大切にし、そして利用していくかが、今後、特徴のあるまちづくりを進めていく上で、大きなウエートを占めてくると思う。

自然と人間を媒介する新しい神様を

パネリスト：高城　修三氏

地元に住んでいる人は、琵琶湖に対して、大した感情を抱かないかもしれないが、昔、交通の便が発達していないとき、

実際に見たいという強い憧れがあった。初めて、琵琶湖を見たときの感動、今でも鮮明に覚えている。琵琶湖というのはどのように発見されたのだろうか。地元の人々にとっては、「琵琶湖はそこにある」としか思えないだろうが、（私は）実は非常に多面的な価値を持ったものだと思っている。その価値は一時期に発見されたものではないし、そこに住んでいることで発見されたわけでもない。さまざまなかたちで、琵琶湖のさまざまな価値は発見されてきた。

もちろん生活の場として、生活の糧を得るための琵琶湖は、人間が生活してきてからずっと存在していた。これ以外で重要なもの、それは湖上交通としての琵琶湖だ。湖上交通の発見は、日本の歴史にとって非常に大切なものだった。琵琶湖が日本のほぼ中心に位置し、交通の要所だったことなどが理由だが、湖上交通を支配することの経済的なメリットが高く、日本史に登場する有力者は、こぞって支配権を求めた。織田信長もその一人。

湖上交通以外にも、琵琶湖は神の住む湖として、その存在を認知されていた。湖なので水の神様が、竜神や弁財天といったことろが住んでいた。『神様』というのはきれいな所に住むもので、汚い所を嫌う。従ってきれいにしておかなければいけない。そのうえ、水の神様は美しい女性の神様が多くて、ねたむ力が非常に強いらしい。このため、水を汚すものがやって来ると、ねたむ力でやっつけていたそうだ。

また、琵琶湖自身を神とあがめる風潮ができて、人々は水を汚さないようにしてきた。それはまた近江八景と呼ばれるように、風景としての琵琶湖の価値を高めていくことになった。

しかし、琵琶湖も近代になると、水資源としての価値を求められてくるようになる。そのころから、人は神様という敬うべき存在のものを媒体にした自然との付き合いを忘れ、自然の征服（利用）という考えに変化してくる。結果として、高度経済成長期における急速な水質汚染、環境破壊を引き出してしまったのは、ご存じの通り。人間にとっての代償は大きなものとなってしまった。ところがこれは皮肉なことに、「環境問題のシンボルとしての琵琶湖」を発見することとなった。一度は壊れてしまった自然との関係だが、私はこの発見が自然と人間を媒介する新しい神様をつくり出すきっかけとなってくれると思っている。

生態系にかなって生業を続けてきた

パネリスト：西川　幸治氏

水に関して、日本人は世界の中でも非常に特異な、恵まれた環境の中にいる。ある評論家は、「日本人は水と安全はただで買えると思っているが、ユダヤ人はその逆、水と安全を手にいれるためにはどんな代償も払う」といっていた。

シンポジウムのテーマは「水と景観」ということだが、近江に関していえば、住民は恵まれた（琵琶湖）の水とうまく生活を結び付けて、生業を営み、暮らしを続けてきたんだと思っている。例えば「すがのうら」というところは、琵琶湖でも一番北の地域にあるところで、一番寒いところと思いがちなんだが、琵琶湖周辺の中でも、みかんの栽培が盛んなところ。背後にそびえる山々を背景にし、琵琶湖という大きな湖を前にすることで、その暖かさを利用してきた。

近世になっても、それは見られる。近江八幡では、瓦（かわら）の生産を記念して、「瓦ミュージアム」がつくられることになった。このあたりで瓦をつくるときは八幡堀にあるたい積したヘドロをたんぼに移し、その代わりにたんぼから粘土を取り出し、それを焼くという方法が、取られている。

ヘドロは非常に多くの栄養分を含んでいるので、たんぼには最適だし、たんぼから不必要な粘土を取り出すということなので、大変エコロジカルだ。琵琶湖の水を生かしながら、人々は生態系にかなった生業を続けてきた。それはまた、琵琶湖の景観が文化性を持つことにもつながっていく。そして景観は、歌に詠まれ、描かれることによって育てられ、守られてきた。

琵琶湖の環境破壊をもたらす原因の一つになった、現在の科学をすべて否定するわけではないが、こうした先人たちの知恵をうまく用いて、琵琶湖を、自然を考えていくことがこれからのまちづくりには大切。自然を愛（め）でる気持ちを住民・行政が強く持ち、専門家の力も借りてまちづくりを進めていくなら、これからの展望は自然と開けてくるだろう。

景観も文化の一つ、エコロジカルが必要

パネリスト：半田　真理子氏

わが国で景観について、関心が持たれ始めたのは昭和50年代の後半、建設省に設置された「美しい景観を考える、美しい建設を考える懇談会」で『美しい国土建設のために』と題する報告書が出されたころだと記憶している。

この報告書は景観形成の理念と方向性を掲げ、実現に向けて数々の施策を打ち出した。その中の一つとして、水辺をよみがえらせることが大事だとする項目が

あった。そこには「水辺は人の生い立ちとともにあったことをとかく現在の人々は忘れがち。水辺の姿を取り戻すことは、自然との関係を今後考えていく上でも非常に大切なことだ」というようなことが、うたわれている。

昭和61年には「都市景観懇談会」が設置された。ここでは「良好な都市景観の形成を目指して」という報告が出された。「都市景観は地域の共有財産である。景観への配慮は都市生活のマナーである」ということが記されており、これに沿って、さまざまな施策が現在も実施されている。

<スライドを用いて、世界各地の景観を紹介>

日本人からすると、なんだかとても堅いようなイメージを受けるが、ドイツなどでは人と自然の織り成す絵のような風景を、「文化景観」という言葉でよく表現する。景観というのは文化の一つ、何も特別なものではなく、身のまわりにある、景色・風景が文化だという概念が当たり前のように浸透しているからこそ、自然に人々の間でごく普通の言葉として使われている。

景観は、「観る」対象があって、観る人がいるという意味で使われる言葉。ある意味で非常に奥深く、難しいものでもあり、あるいは非常に身近なものかも知れない。人がそこに介在するからこそ、「景観」というものが成り立つ。ただ、景観はだれが観ても同じものではない。（人によって）それぞれが違う歴史や過去があり、さまざまな経験や記憶を持っており、いろいろなイメージが出てくる。

こうしたことを踏まえながら、これからの景観づくりは、生態系にも配慮した、人だけではない、自然にも優しい「エコロジカル　ランドスケープ」として進めていく必要があるのではないか。

自然と働きかけあえる「人里」を

パネリスト：日高　敏隆氏

水という言葉を聞いたとき、３年ぐらい前にアフリカのナイロビから飛行機でヨーロッパに帰るとき、ナイル川の上を通ったことを思い出した。いわゆるホワイトナイルとブルーナイルが合わさって、ナイルとなって流れているのだが、すごい砂漠の中でどうしてこれだけの水が、吸い込まれもせず、流れているのか不思議に思うと同時に、驚きも大変なものがあった。

また、私は仕事でよくビクトリア湖に行くのだが、そのほとりには「ホマ・ベイ」と呼ばれる小さな湾がある。ベイはもちろん英語だが、ホマというのは英語ではない。実は熱病という意味。かつてこの湾のあたりには、黄熱病あり、各種のマラリアありでとにかく熱病だらけだったそうだ。ただ、それを英語にしてしまうと観光客がこなくなってしまうので、わざと英訳しないということ。日本では、自然や環境を守れという話になると、必ず、「どんな自然や環境を守るんだ」という非常に変な議論になる。環境というと、まちや都市の中の環境も環境ではないかなどと。京都でも東山の自然を守れという議論があったが、一体いつの自然に戻すのだろうか。今は松の木が生えているが、一番最初はうっそうとした原生林が茂っていたはず。

普通、日本人が歌や景色に関して、思い浮かべる東山というのは、人間が無茶苦茶に手をいれてしまった後のもの。だからといってそれを「本当の自然ではないのだ」と言い出してもしようがない。では、われわれの心和むような自然とは一体どのようなものだろうか。

考えるに、それは原生林ではない。原生林では木や植物の種類が、ごく限られている上に、それが密集し、薄暗い、じめじめとした場所を演出している。そんな所ではピクニックにいこうという気すら起こらないからだ。われわれが本当に心和む自然とか水辺というのは、人間が必ず働きかけをしたところ、「人里」とでも言うのだろうか、明るくて、たくさんの植物が生え、チョウが舞うようなところではと思っている。

自然を守ろうとするならば、〝人間がいなくなること〟が一番よい。しかし、それでは困るのでどうしようかということ。昔は自然を守ろうとしている人たちにとって、建設省や企業は敵だった。最近は建設省も結構変わって、いろいろなことを考えているようだ。

だが、基本的にこうやろうというプランを考えるのはよいが、この場所ではどうするか、あの場所ではどうするかということを（建設省が）全部調べることは無理。それぞれの地元でやることになるのだが、（地元が）全部分かわるわけでもないので、生物などの専門家を加えて、やっていく必要がある。私は「日本蛍の会」というところに入っているが、この会は、そういうことを手助けする組織だと考えてもらいたい。自然と人間の関係は、互いに働きかけ合えるようなもの、「人里」をつくれるような関係が望ましいと思う。道路をつくった、その後には草も木も生えないということに人間の勝利を感じるようなことは、もうやめた方がいい。

滋賀県企画部地域振興室　主査
TOORU KAI
甲　斐　徹
滋賀県大津市京町４丁目1-1
TEL.0749-22-1411（代表）

'94滋賀・彦根シンポジウム開催について

日本最大の湖である琵琶湖とそれを取り巻く緑深い山々などの美しい自然と豊かな歴史に恵まれた滋賀・彦根の地において、社団法人日本建築美術工芸協会主催により'94滋賀・彦根シンポジウムが５月13日、700人を超える参加者を集め、盛会に開催されましたことは、微力ながら、お手伝いさせていただいた者として大変嬉しく思っております。

今日、この滋賀においても、急激な都市化が進展し、生活様式や生産活動が近代化しました。これに伴い、琵琶湖にも赤潮が発生し、水質が悪化するとともに、ふるさと滋賀の美しい風景も徐々に変貌し、先人が育ててきた財産が失われようとしています。このような危機感から、琵琶湖の水質の保全を目的に昭和54年に「富栄養化防止条例」を、昭和59年には、自然と歴史とまち並みが一体となったうるおいある湖国の風景を守り育て、調和のとれた景観を創造することを目的として「ふるさと滋賀の風景を守り育てる条例」を全国に先駆けて制定するなどの取り組みを県民一体となって進めてきました。こうした取り組みをしてきた滋賀において、「水と景観」をテーマとして開催されたシンポジウムは、内田文化庁長官の記念講演や、各分野のパネラーの方々によるパネルディスカッションなど、我々滋賀に住む者にとって示唆に富んだ内容であり、これからのさらなる取り組みにインパクトを与えて下さったものと思っています。

私事になりますが、私はこの４月の定期異動で企画部地域振興室の配属になりました。したがって、私がお手伝いさせていただきましたのは、開催日の５月13日までのわずか１カ月間だけでしたが、景観行政に携わることになって１番最初の仕事として、このシンポジウムの開催に係わらせていただいた経験は、内井先生をはじめとするパネラーの方々や協会の方々の多くの方とお会いすることができ、よい思い出となるとともに、今後の仕事に活かせる多くのことを学べたように思います。

配属になって間もないということもありまして、何かと戸惑いもあり、どれほどお役にたてたか、協会の方々や、一緒に開催のお手伝いをしていただいた彦根市の方々にはご迷惑をお掛けしたことをお詫びしたいと思います。最後にこのシンポジウムが今後さらに全国各地で回数を重ねられ、美しい景観づくりの貴重な発信源として水面に広がる波紋のように、その輪を広げられることを念願するとともに、社団法人日本建築美術工芸協会がますます発展され、御活躍されることを祈念します。

大成建設株式会社
建築営業本部　営業部部長
MASATO ISHIDA
石田　眞人
東京都新宿区西新宿1-25-1
（新宿センタービル）
TEL.03-5381-5091

'94滋賀・彦根シンポジウムと信楽の旅――印象記

「温故知新」

生来、好きな古建築を見て歩く事が嵩じて建築を志した私が、社会に出ると同時に仕事に翻弄され、約30年近くその楽しみも忘れてしまっていましたが、その復活ができたのが今回の研修旅行でありました。

シンポジウムでは、琵琶湖と共生する滋賀・彦根の人々、又同様な環境を見つめている人々が参加し、パネリストの先生方や経験豊かで機知に溢れた話を受け、数々のヒントを与えられている姿は、明日からの仕事や生き方に強い希望を持つことが出来たことと推察しました。正に彦根のこの地で開かれたことが名実共に的を射た企画であったと感じました。

二日目からの研修旅行では、彦根市が市民の協力を得て総力を上げて研究保存に努力している町並みの保存復元事業・彦根城及び博物館、さらには湖北の十一面観音像を見学。

普段は新幹線の車窓から遠望しているだけの彦根に初めて降り立ち、宝箱を開けたような新鮮で強い印象を憶え、これ迄に費やされた人々の多くの苦労には敬服の念を禁じ得なかった。

最終日の京都府立陶板名画の庭と信楽の旅では、最も素朴な陶芸の技術の伝承と最新技術と設備の駆使による美術陶板との両極端を見る事ができ、また多くの人々の苦労と意欲に驚嘆した次第でした。

今回、aacaに入会したばかりの小生ですが、井の中の蛙で、未知の分野で多くの人々が地域・産業の発展に寄与されているのを知った事、又今回暖かく迎えて下さったaaca会員の皆様方との出会いの二つが、自分にとって新たな財産となった事を報告したいと思います。最後に大塚オーミ陶業の社長様始め、研修旅行を支えて下さった皆様に感謝しつつ、次回もぜひ参加致したいと希望している次第です。

菊川工業株式会社
取締役　営業副本部長
YOSHITAKA TANIGUCHI
谷口　好孝
東京都墨田区菊川2-18-10
TEL.03-3634-3231

'94滋賀・彦根シンポジウムと信楽の旅――＜研修記＞

シンポジウムに参加した際、テーマ「水と景観」のパネル討論会の質疑応答で「彫刻のついた橋がありますが、廻りの景観にマッチしない作品を見かけます。よくする為にはどうしたらよいのでしょうか」と言う質問がありました。パネリストの澄川先生のお答えは、「作者として大切な事は橋と彫刻が一体に調和するよう事前に廻りの環境を良く調査した上で、見る人々により良い景観を感じさせるような彫刻を製作することです」と答えられました。メタルアートの仕事をしています私にとりましては、普段当たり前と思いながら気がつかない、大変貴重な教えを受けました。

翌日からの研修旅行では、国宝彦根城の天守閣の外観の美しさに一瞬見とれてしまいました。いくつもの千鳥破風（入母屋、切妻）と唐破風の屋根様式を巧に組み合わせた曲線と、瓦に模様が付いていて一層美しく豪華絢爛に感じました。江戸初期（1622年）に築城した際、当時、工事に参加した各職種の職人達のすばらしい手業に感動しました。

短い見学時間でしたが、いにしえの建築ロマンを体感することができました。

最後に、信楽の旅では大塚オーミ陶業の社長様をはじめ、日曜出勤して支援していただきました社員の皆様に御礼申し上げますと同時に、研修旅行を支えて下さいました皆様に感謝申し上げます。

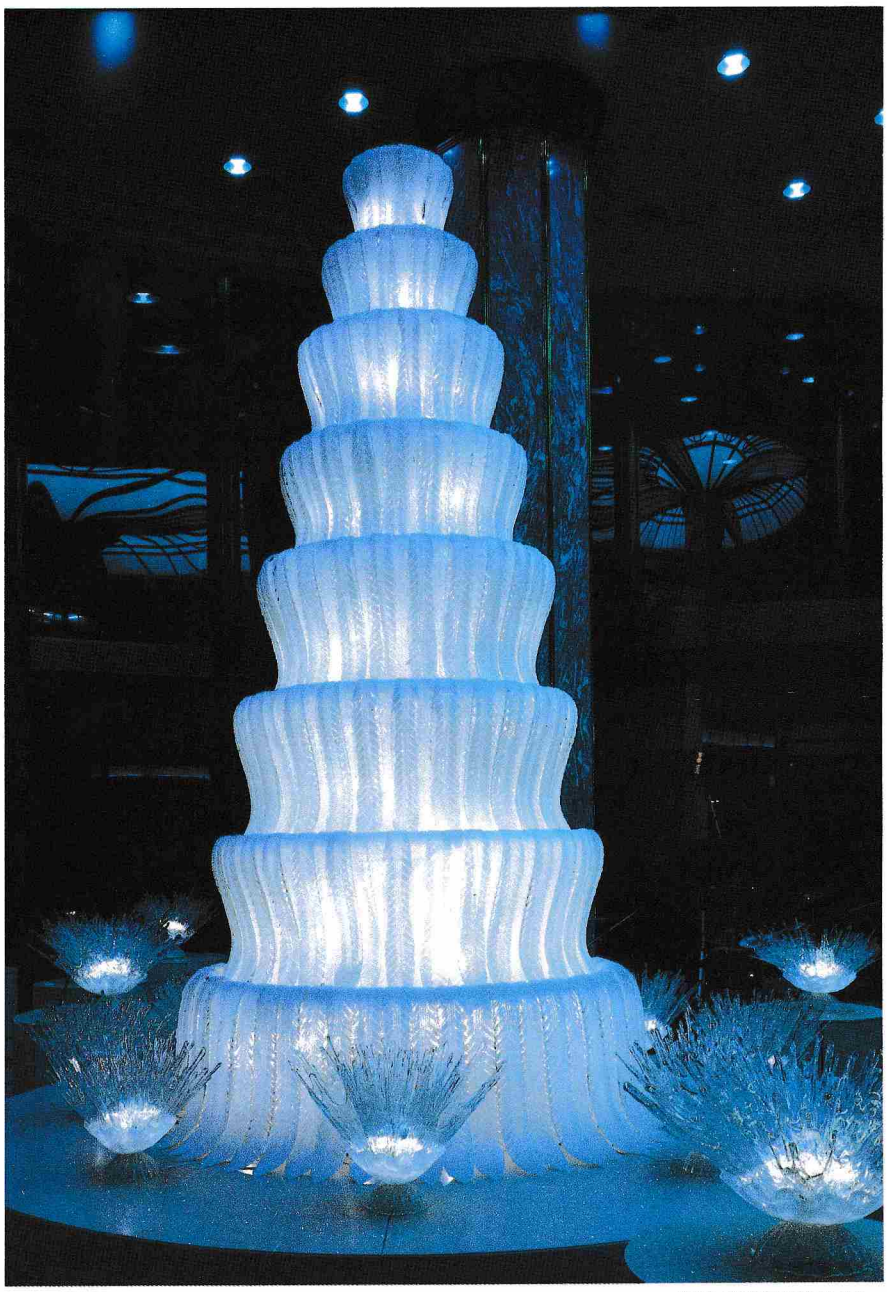
時代の華一輪

ニューヨーク
コーニンググラス美術館理事
ITOKO IWATA
岩田　糸子
東京都葛飾区堀切4-65-4
TEL.03-3604-3121
FAX.03-3601-6323

人間がガラスを作り始めて数千年、ヨーロッパの各地では職人たちの永い歴史があり、19世紀末のアールヌーボーのガラスに至るまで素晴らしい発展を遂げてきたが、今日ブームといわれる現代ガラスは世界的にもまだ日は浅く、1962年にアメリカのハービィ・リトルトンとドミニック・ラビノの２名が最初に作品を発表したことで認識された。これはスタジオ・グラス・ムーブメントといわれ、職人的完成度を重要視するのではなく、アートを表現する素材としガラスを自由な角度で追求し始めたものであり、30余年経った今日　ガラスブームといわれるほどになったのである。

日本ではそれより35年ほど早く、義父の岩田藤七が自分のアートの素材にガラスを選び、毎年展覧会を開催し発表し続け、世界でもユニークな日本のガラスとして作風を確立し、主人の岩田久利へと受け継がれた。そしてニューヨーク・メトロポリタン美術館に19世紀末からスタジオグラス運動が始まるまでの間の世界のガラス史として岩田ファミリー（藤七・久利・糸子）の作品が1988年に永久収蔵された。その年に新設された20世紀デザイン&アーキテクチュアのギャラリーに一部展覧されたが、最も感激したのは来日して非常に多くの写真を撮って行った上に、コーニンググラス美術館等、他の美術館に既に収蔵されていた作品の資料も取り寄せ「アメリカに於ける岩田ファミリーのコレクションが完璧になるよう選んだ」とのことでアメリカの美術館というのはこんなに大きな視野で選定するのかということであった。

今年は、もう二つのアメリカ人のフェアなことに感激することがあった。３月のグラス・アート・ソサエティの第24回年次大会で最高栄誉賞「Lifetime Achivement Award」を受賞したのである。私の前には創作者ラビノとリトルトンの２名しか貰っていない賞で世界の「コンテンポラリー・アートグラス・フィールド」を高めた功績に対してであった。もうひとつは、娘のルリがコーニンググラス本社新社屋に、チェコのリベンスキィ、スエーデンのバリーン、アメリカのチフリと共に、中庭の一つにガラス彫刻の大作を依頼され４月に完成した。日米財界人会議でも米側代表で来日したコーニング社会長ジェームズ・ホートンが経済摩擦をよそに、日本のルリを選んだのである。
どれをとっても、本当に仕事を正当に評価するということであり、アメリカ人の健全で自信のある精神に敬意を表するとともに、大変に羨ましいと思った次第である。



新宿三越別館１階フロアー

㈱長谷川デザイン研究所
SAKAE HASEGAWA
長谷川　栄
浦和市元町1-27-16
TEL・FAX 048-866-2402

革新の続くパリ、シトローエン・パーク誕生

モニュマン制作は男の生き甲斐

パリはいつでも刺激的である。あの大々的なグラン・プロジェの改革でオープンしたルーヴルのピラミッド、オルセ、ラ・ヴィレット、アラブ・センター、アルシュ等のあと、ルーヴルではリシュリー棟の逆ピラミッドを完成、世界最大の国立図書館を着工、ウィレットの音楽シティを開放等々焔のように燃えている。

パリを囲む未知都市のサンカンタン・アン・イヴリン、マルヌ・ラ・ヴァレ、セルジィP.等をなぞるように訪れると、個性の主張は華やかで、引続いての革新的な建築群の完成があい次ぎ、さながら大学の卒制展のマケット展示のようにわくわくさせる。空間にたいし詩的な挑発を続ける Ettore Sottsass （9月5日までポンピドーセンターで個展開催中）のように、アートを超領域的に横断したECO-MUSÉEの哲学が都市計画にあるからだろうか。

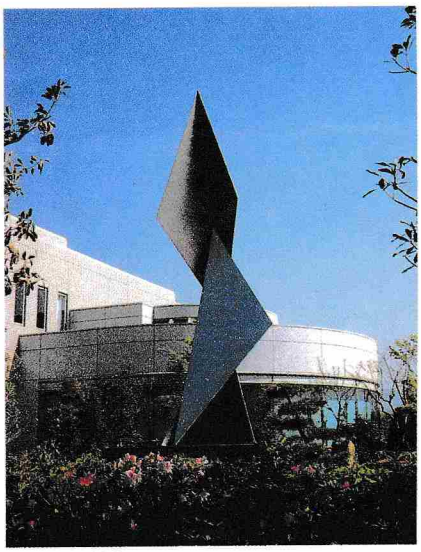
なかでもことし完成まぎわの<シトローエン・パーク>は凄い。パリのどまんなかの15区の14ヘクタール以上の広さを人間の五感を超える<第六感>に訴えるように計画したという。茫洋とした野草の繁茂と、金銀銅・亜鉛色を基調としたパルテノン風のキューヴな巨大温室の列や、地面から直接吹き出すダンシング・ウォーター等が、第二帝政いらいの都市大改造の夢を託して登場した。

この公園が素晴らしいのは、何よりも人為の空しい虚飾をサラリと捨てて、見せ場を持たないことで、しかしネガティブな空間造りには、れっきとした哲学の存在を感じさせる。風景家のアラン・プロボストとジル・クレマンがパトリック・ベルジェなど3人の建築家と組んで計画した洗練された環境づくりの模範である。ことしパリを訪れるものには見逃がせない場所として推選したい。

こんどAACAの熱心なお誘いで光栄にも仲間入りさせて頂いたが、私の専門はミューゼオロジィとメタルの造形である。広域のECO-MUSÉEによるミューゼオロジィは、このごろ工業団地やコンピュータ基地などのヒューマン化にサインやモニュマン計画として役だったり、アイデアだけでなく、この写真のように実際の作品で参加して実証させて貰っている。2美術館長と評論と作家と、同名が3人いると思われているが、まぎれもない同一人物で、なかでも最も痛快なのは何トンもの大作を青空に向けて立てる時などで、作家でいる自分がつくづく幸せに思う。芸大在学時代に慶応の舞台美術研究会に入り、照明の巨匠大庭三郎氏に就いた影響で、光が絶えず気になり、ストロボでパネル信号を乱射する生きもののように呼吸を続けるレリーフも、暇さえあればアトリエで製作している。ちかく9月の銀座イトーキの個展で皆さまのお目にふれることを楽しみにしている。

毎年パリの調査行きでも、こんどもまたパリジャンたちはカルチャーショックを用意していた。かれらの都市計画・造園・環境づくりには異ジャンル、異業種間を横に貫くソフトなエコロジィの思想が流れ、難なく未来空間に合意させつくりあげてしまう不思議な伝統がある。

業種毎の団体ではないAACAはきっと、こうした理念をもった先端的手法を先取りした組織ではないかと思う。



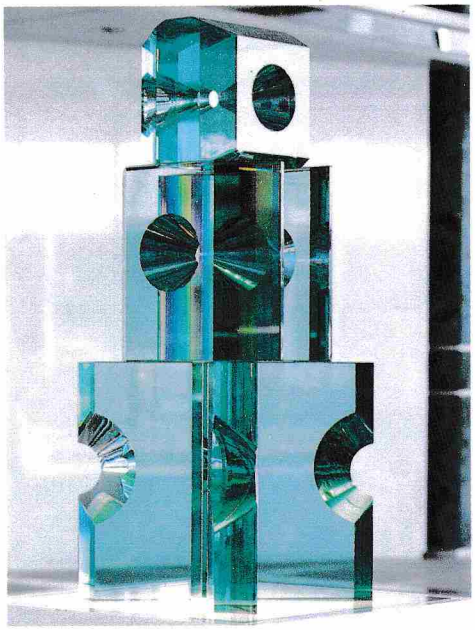
制作：長谷川栄
テクノプラザ愛媛モニュマン〝未来への飛翔〟

制作：長谷川栄 WAGOビル ストロボ・レリーフ〝宇宙との交信〟

アピアランス 会員作品紹介

彫刻家
YOSHIKO TAKIGAWA
瀧川嘉子
東京都大田区南千束2-20-5
TEL.03-3726-3702

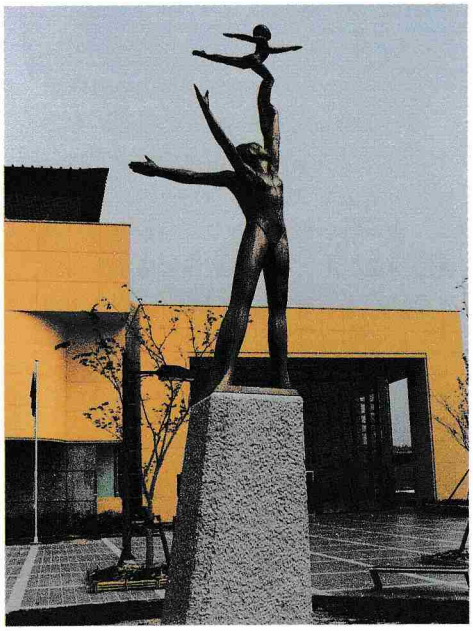
「メモリー・トランセンデント・No.16」にあたる作品だが、この作品実現に御尽力下さった方が作品の完成を見ずに他界された為、その方への感謝と追悼の意を込めて「追憶」と題した。



「追憶」1994
設置場所：
品川クリスタルスクエア
1920mmH×1150W×1150D
(硝子のみ1120H×500W×450D)
作品の撮影者：本多史博

日展会友
MASANOBU KITOH
鬼頭正信
日本新工芸家連盟会員
愛知教育大学講師（非常勤）
工房カオス主宰
愛知県大府市大府町家下77
TEL.062-353-1868

市政5周年の記念事業としての市民体育館の新設に合わせ、グランドと挟まれる空間を小公園とし、モニュメントを設置することになった。現在を表す大人の男女が未来を表す子どもの飛躍を支えるという形を純銅の鍛金による像に制作。



「碧空」
設置場所：
愛知県大府市
高さ：像高4m、
台座(花崗岩)2.4m

サンダイアリスト（日時計作家）
TERUKO OHARA
小原輝子
神奈川県相模原市上鶴間5-6-5-107
TEL.0427-44-4499

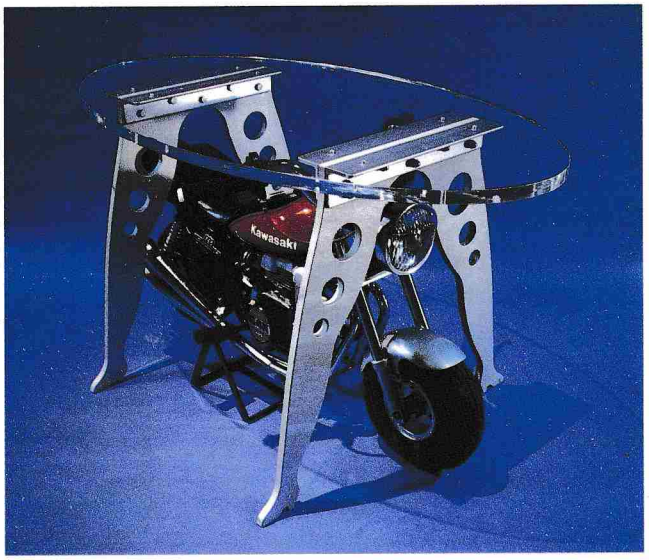
時間の概念を宇宙の運行に学んだ私達、太陽の動きに「時」を読む。朝がはじまり午後の影が長くなってまもなく夜、また1日が過ぎやがて1年。自然と渾然一体となって時をきざむ日時計。日時計は心にやさしくひびく…

円弧型日時計
設置場所：岡山県倉敷市児島
3800×1600

㈱現代造形代表
HARUHIKO KUBOTA
久保田　晴彦
東京都大田区上池台1-33-17
TEL.03-727-5444

これは或るコーヒーショップのためのテーブルでポケットバイクは各テーブル毎に異るモデルが納っている。
最近は来る仕事が小振りになっているが、仕事の大小にかかわらず通念とか既成概念でテーマをとらえないように心掛けている。

設置場所：田無市
11,000L×640W×600H



※今回初めての企画でしたが、多数の応募がございました。掲載できなかった作品は順次掲載させていただきます。皆様ふるってご参加下さい。

第61回　1994年5月21日

ゲスト　㈱エイアンドスリーエム
環境企画代表取締役
AYAKO YAHAGI
矢作彩子氏

今日の私のお相手はオーストラリア国籍の変な外人ビクトー マーレィさんです。

彼との出会いは、私の英語の先生としてでしたが、初めからレッスンはそっちのけで、他の話しばかりで、その頃まだビックの日本語も私の英語と同じくらいだったので、共通語などありませんでした。ボディランゲージと英語、日本語がミックスした言葉と後は共通の趣味があったので、何か感じる信頼愛を目で感じ取り合うといった状況でしたが、何故か意見も心も通じあい、2時間近いレッスン時間が、雑談で終わってしまう日々の繰返しで、おかげ様で（?）今だに英語が上達しなく悪い先生と悪い生徒の二人です。

そして、ビックの家族（ビックと奥様と娘さん）3人と韓国の夫婦2人そして私のパートナーと計7人で、温泉旅行へ1BOX車でワイワイと出かけた時の事です。車中で私が一生懸命作ったおにぎりもビックの目には、異様な物としてしか写らなかったのです。黒い丸い爆弾の小さいのみたいで、素手でさわればベタベタくっついてしまうノリなどとても口には入れる気にはならなかったそうです。

後で聞いた話しですが、その上温泉に入るとき、一番びっくりして気持ちが悪いと思った事は、男同士男達だけ素裸で入る浴室、浴槽、だったそうです。オーストラリアの歴史で分かる様に最初に移民したのは囚人と看守達、あらくれで乱暴な人達と女性がいない社会において、裸で素手で1ヶ所に多くの男性達が集まるという事はどういう事か想像出来るはずです。私達の文化では男女一緒の方がよっぽどびっくりするのに、オーストラリアでは男女一緒の方が、争いとかが起こらないので安心なのだそうです。

温泉と言えばやはり和室の方が私達はくつろげます。でもこの文化をアメリカの人に実感させようと一緒にプロジェクトを組んでいたアメリカ人夫婦二人組を草津温泉の高級和風旅館に連れ出した時の事です。案の定、畳等和の内部建築に目を輝かせていましたが、私の「畳はくつろぐのに最高よ」という言葉に「ノー、やっぱりくつろぐのはやわらかい大きなソファが一番」と口を揃えて言いました。それではと私は皆を浴室へ案内し、たっぷりお湯を楽しんでくる様に、そしてゆかたを着て部屋に戻ってくるように言いました。ちょうど6月の始めの少し蒸し暑い頃でしたので、4人は顔をまっ赤にして、ぎこちなくゆかたを着て、これ又何とも言えない状況で締められている帯をみて、ニヤリ・・・「さあ冷たいビールを畳に座って、うちわを片手に飲みましょう」と言ったのです。皆それぞれちょっと不満そうに「クーラーが欲しい」と言ったのですが、私は縁側と部屋の入り口を少し開けただけで彼らにビールを飲ませました。それでも「冷たいビールはとってもおいしい」と言いながらグイグイ、そして「少し疲れた」と言ったので、押し入れからそれぞれにそばがらのまくらを出し、「さあ、このままで昼寝しましょう」と言ったのです。彼らも疲れていたので、しぶしぶ思い思いにまくらをもって自分のベット領域(?)を決め、ゆかた姿で片手でうちわをパタパタさせながら横になりました。どうでしょう、「ウー冷たくて気持ちがいい」と一声を上げて、5分もしないうちに全員グーグー、スヤスヤ、それはもうみごとな位、私の作戦成功です。目をさましたとき彼らの一言「日本人は最高の贅沢を知っている」との事でした。そんな彼らも和式トイレだけはどうもダメ、不安定でおしりから便器に落ちそうで出るものも出ないとの事で部屋のトイレではなく廊下の奥にある洋式トイレまで出かけて行った様です。

直になじめる文化、絶対になじめない文化、そして、なじもうと努力して失敗しているのに気付かず余分な恥をかいてしまっている文化もあります。

私の会社にカナダからのお客様が2名いらした時の事です。私のオフィスは玄関で靴を脱ぎ、スリッパに穿き変えるのですが、帰る時に玄関にお見送りに出た所、スリッパ入れに何と二人の靴が鎮座しているではありませんか、そしてかれらはスリッパを脱ぎ裸足で土間のコンクリートの所に立ち、靴に手を延ばしそこで片方ずつ穿いたのです。最初の片方を穿く時には、スリッパ入れより出してジュータンの床の部分にもう片方をおいて、わたしは「えっ！」といいかけて、おもわず口に手を当ててこらえました。彼らは一生懸命日本式の玄関のマナーをカナダで勉強した通りがんばって実行しているわけで、少々の状況の違いなど思いも付かないのです。でもさいわい、きたな

第62回　1994年6月17日

ゲスト　クレイワークスタジオ代表

SACHIKO KAWAMURA

川村紗智子氏

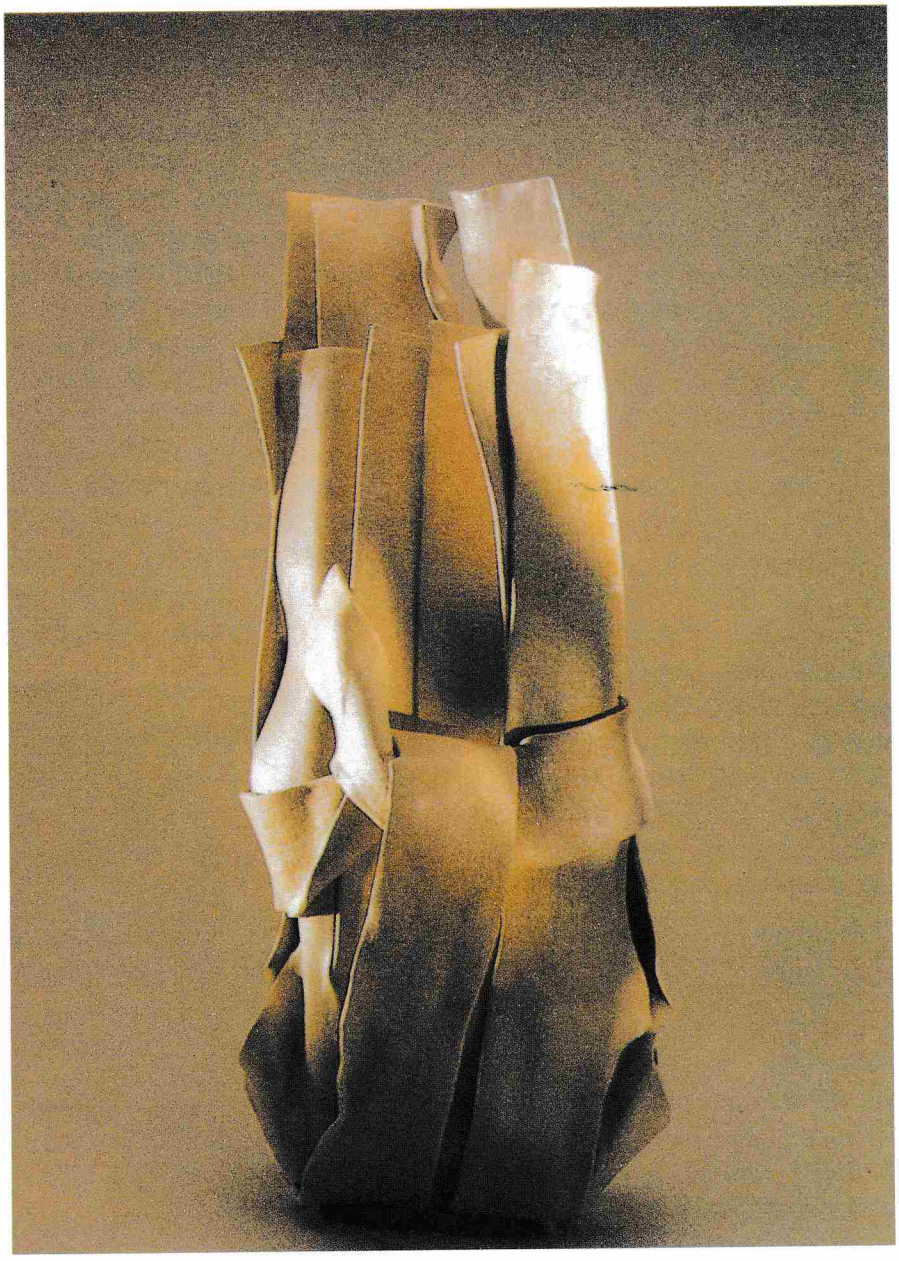
いという感性はやはり人類共通でカナダ大使館のマッケンジー氏にお会いした折りおフロは日本式で入浴しているそうです。一度おぼえてしまったら、もうバスタブの中でつかりながら洗うという事は考えられないそうです。

文化の違いで一番びっくりしたり、こまったりするのはトイレです。男性は自分の息子がチューリップの花ビラにちょこんと乗っかってしまって、どうしようと思わず廻りをキョロキョロと見てしまうといった体験をしているそうですし、女性は上も下もおお開きのブース扉に思わず赤面したり、便座に座ったら足が床につかず、子供の様にブランブランさせてしまったり、いきおいよく座ってしまったら便座におしりを喰いつかれ、抜けなくて足をバタバタ、手で何か廻りの物につかまろうと延ばしても広いブースの中、むなしく空を切るだけ・・・イヤーもう絶対旅行中は飲物はやめようと決心してしまうのです。トイレトイレと駅中さがしてやっとあったと思ったら小銭がなくて思わず後退り、もったいないと思うが、緊急の場合はしょうがないと自分自身に言って聞かせ何とか無事にさわやかになって、ふっと、そうだ、「おつりをもらえば」と思って無愛想なおばさまにとっておきの笑顔で「・・・・・・。」ああこんな時英語が出てこない。みごとにタイミングがずれてトイレの外へ、・・・・・・後悔の念をいだきながら「やっぱり日本がいい。もうこんな国はイヤだ」などとブツブツ言いながら、又来てしまう外国。そう何度も何度も失敗したり、恥をかいたりしながらも、時々ステキな男性に会って歯の浮くようなおせじを言われ幸せな気分になったり、やっぱり外国はいいなんてのたまうのです。

人類は皆同じ、国籍がとか肌の色がとか、文化がなどといろいろちがいはあるけど。その人〝個人がどういう人か〟という事が全ての違いを乗り越えてしまう。個人対個人の間には国境も言葉も文化の違いも、なんの障害もならずに、かえって期待すべき未知への遭遇となるのです。

―地球に融ける―

今回のタイトルで、地球に触るという字が、融けるに変わってしまい、意味深長になりました。陶芸の世界ではこの融けるということに皆神経を使っているからです。日本では多くの陶芸家が高温1250℃～1300℃で土を焼き、釉薬（表面のガラス質のもの）といかに合体させ、美しい作品を作りあげるかに苦労しており、温度とのたたかいでもあるわけです。ですからこの融の字は陶芸家としては大変意味が大きいわけです。地球＝土に触れるのではなく、土に融けるのは、人間という生命体は今のことろ長く生きても百年ほどですから、いづれは三次元としての肉体は土に融け込んでいくので、このタイトルも捨てたものではありません。土の話をするということは、地球の概念は宇宙飛行士ガガーリン「地球は青かっ



た」と言った時間から、地球上の人類は、地球は青い水の惑星であること、暗い宇宙に浮く孤独な星、宇宙船地球号としてただよっていること、ガイア思考として皆が共有することになったわけです。しかしこれはバーチャルリアリティーで、皆が宇宙に出てみたわけでないので、不思議な意識だと思います。しかし現実に身の回りではオゾンホールの拡大（これも認識はむづかしいことですが）、空気、水の汚染等は身近な現実です。こういう状況において一人一人が地球に触れる機会を持ったらもっと早く確実に地球の存在を認識できたかもしれません。今はマンション等の建物がふえ土にさわる機会がほんとうに少なくなりましたが、ベランダの土や、近くの公園、通りの木々に触るのも大きなヒーリング（精神の安らぎ）になります。陶芸に使われる土は特別な土の様に思われますが、考え方を変えますと、足もとにある土も陶芸に使えるのです。地球儀に考えますと地球上のどこに行っても土があれば陶芸は出来ます。私自身アメリカに行き制作する機会が何度かあり実感となっています。足元の土を触って手の感触を充分楽しんで下さい。いろいろな生命が生まれてくる素晴らしい素材です。水を加えて、粘りを身近な天然素材で加えるのも良いかと思います。食卓にのる卵、魚の食べたあとの骨、貝の殻等、炭酸カルシウムで陶芸の場合、釉の溶媒の働きをします。食塩は最も強烈な溶媒剤です。これからは身近なものを改めて目をむけてみて下さい。よく言われる灰について、根＝炭酸分（浮濁剤）、幹＝塩酸分、葉＝石灰分＝炭酸カルシウム＝古代サンゴの化石＝貝、木や葉の種類によってもそれぞれの成分が変わっていき、科学肥料などを与えた植物は灰に戻して土にかけた場合等、醜く変化をおこしてしまいます。地球にやさしくといろいろな方面で言われており、陶芸の世界も決して無縁ではありません。登り窯などをたくために、全国で膨大な量の薪として木々が伐採されています。一本切ったら一本植林する心がほしいものです。

私の今、与えられた時間の役割は、素材として土を、形にするための手を使い、自分の存在の意味を問いかけながら、宇宙への思慕というコンセプトにより作品を制作し始めています。日本の外から日本をながめたとき、日本人としての自覚から、日本人の精神の裏づけを宗教にさぐり、仏教以前の神道、その前の原始宗教へとさかのぼると、日本人、東洋人としてではなく、人間の本質への問いかけになり、生命体が遙か宇宙の彼方から届いたかもしれないという想いをいだき、作品へのバイブレーションを高めて、一人でも多くの人々との交流、共感、共振を得たいと思っております。

AACAトーク 1994年度開催予定

これからのトーク開催予定

場所：東陶機器㈱
TOTO銀座パビリオン9F
会議室
（東京都中央区銀座7-8-7）

時間：午後6時～午後8時

会費：1人 1,000円（茶代含む）

第63回　1994年7月15日㈮
ゲスト：坂上　直哉
（アーティスト）
「一つのテーブルから考える明日の風景」
大地に美の模型を創る人々と共に
－羽田空港他アートワークスより－

第64回　1994年9月16日㈮
ゲスト：伊部　京子
（造形家）
－空間造形の素材として－

第65回　1994年10月21日㈮
ゲスト：伊藤　萠木
（金工家）
－金属の美しさを求めて－

第66回　1994年11月18日㈮
ゲスト：酒井　忠康
（美術評論家）
－「彫刻」について－

●かねて事業委員会で企画していました特別講演会が実現の運びとなりましたのでお知らせいたします。

テーマ

「公共空間におけるアートについて」

（人名、団体等敬称略）

講　　師：ジョーン・モンデール

講演会

日　　時：平成６年10月28日㈮午後３時～５時　終了後、懇親パーティー（午後６時～　　）

場　　所：建築会館１階ホール
東京都港区芝5-26-20
建築会館
（JR田町駅下車徒歩3分）

講演会参加費　無料

主催　社団法人　日本建築美術工芸協会

後援　文化庁　（予定）
アメリカ大使館　（予定）
東京都港区　（予定）
社団法人　日本建築学会（予定）
等

主　旨

現代日本の公共空間における、アートの役割が強く望まれる様になって参りました。「街づくり」での公共空間が、街並の美しさや、公共建築物の機能性、シンボル性と言ったデザインの面だけでなく、自然・環境・生活での文化全般に於けるアートとの関わりが、市民及び行政に携わる方々や建築家、造園設計者の公共空間に於けるパブリック・アートの感心の高まりへとなってきています。

日本のパブリック・アートの方向性については未熟、未発達な段階であり、各方面でパブリック・アートがどうあるべきか議論がなされているのが現状であります。モンデール女史は公共芸術について深い知識を持って、パブリック・アートに対する講演を各地で開催活躍されています。この企画は、公共空間におけるアートの在り方について講演をしていただきます。スライドの上映によりパブリック・アートの作品を紹介すると共に今後に日本におけるパブリック・アートの方向を示唆する講演をしていただくものです。

ジョーン・アダムス・モンデール氏略歴

ミネソタ州・セントポールのマカレスター大学卒業。

専攻は歴史を学んだが、副次科目として美術とフランス語を研究。

卒業後ボストン美術館で学芸員としてスライド関係の仕事をする。

その後ミネアポリスの美術協会で教育者の助手として働く傍ら、見学者の案内や説明の業務を手伝う。

1995年、姉の紹介でウォルター・モンデールと出会う。同年12月にアダムス博士の仲介で結婚。

ウォルター・F・モンデールは1960年ミネソタ州法務長官、1964年上院議員となる。家族は、首都ワシントンに転居。

ワシントンでは、美術と政治に係る機会が多く、ナショナル美術館等見て廻った。

又、近隣の家族を対象に消費者共同組合等を設立。ボランティア活動に参加、公立学校運営資金集め等に貢献した他女性だけの「ナショナルデモクラティッククラブ」「美術協会連合議会」等の委員として活動した。

1972年「美術における政治」を著作。

数年後、北ヴァージニアで著名な陶芸家の元で陶芸活動を志す。1976年彼女の夫はジミー・カーター大統領の許で副大統領に選ばれた。

1977年カーター大統領は、夫人を芸術・文化面で連邦会議・名誉会長に任命。

当時の彼女に付けられたニックネームに〝芸術のジョーン〟と云われる程国民的人気を博した。

４年にわたり芸術奨励のため国内を廻り推進活動を行った。芸術に対する奨励のためあらゆる援助の方策を強く政府に進言した。

1981年以来ジョーン・モンデールは一市民となり、芸術奨励のため推進者として講演活動を続けている。その他ケネディセンターの評議員として「パフォミングアーツ」「ウォーカーアートセンター」「ミネソタ交響楽団」「マカレスター大学」等芸術活動推進に係わった。

●平成７年度芸術家在外研究員候補及びインターンシップ研究員候補の募集について

平成７年度の募集要項が文化庁から示されました。
応募用紙等の関係書類は事務局にお申し出下さい。
応募資格の概要：日本国籍を有する者又は日本の永住資格を有する者で、原則として年齢18才以上。１年間派遣芸術家在外研究員は45才未満、現に専門とする分野で芸術活動の実績があること。心身ともに健全であること。外国での研修に堪えうる語学力を有し、渡航先の研修施設受入の保証があること。研修期間中は定期的に研修状況を報告、また帰国の日から２カ月以内に在外研修報告書を提出。研修実施は平成７年９月からの開始となります。

芸術家在外研究制度　平成７年度研修員選考日程（予定）

日　程	事　　項	日　程	事　　項
6．5．25(水)	推薦団体に対する説明会	7．3月中旬	手続き書類の提出締切
9．21	候補者推薦締切		（承諾書、研修計画書等）
10月下旬	書類選考（第一次選考）	5月中旬	決定的者に対する説明会
11月上旬	書類選考通過者の連絡		（手続き書類等、渡航手続）
	（推薦団体経由本人へ）		正式決定と通知
11．24(木)			（本人、推薦団体）
↓	面接選考予定期間		発表（新聞資料提出）
30(水)	（第二次選考）		
7．1月下旬	内定者の通知	9月～	研修員出発
	（本人、推進団体）		

芸術インターンシップ　平成７年度研修員選考日程（予定）

日　程	事　　項	日　程	事　　項
6．5．25(水)	推薦団体に対する説明会	7．5月中旬	正式決定と通知
	候補者の募集		（本人、推薦団体）
9．14(水)	候補者推薦締切	6．1	研修開始
10月下旬	書類選考（第一次選考）		↓　　↑
	書類選考通過者の連絡		研修団体との契約
	（推薦団体経由本人へ）		↓
11．15(木)			研修状況報告
	面接予定期間		（２カ月毎団体→文化庁）
24(木)	（第二次選考）		研修費の支払
7．1月下旬	内定者の通知		（２カ月毎文化庁→団体）
	（本人、推薦団体）	3月末	研修終了
7．3月中旬	手続き種類の提出締切		研修報告書
	（研修計画書等）		（本人→文化庁）

●AACA　'94サマーフェスティバル開催

会員交流の一貫として、事業委員会主催による第一回サマーフェスティバルを開催いたします。みなさまのご参加をお待ちしております。
日時：８月26日(金)　18：00～21：00
場所：建築会館イベント広場及びホール。
催物：阿波踊り　吉田会員のカンツオーネ　模擬店　等々。
真夏の一夜を会員のみなさまと御一緒に楽しく過ごしていただきたく企画いたしました。なお全員、法被、手拭、扇子を用意いたしております。参加者は協会事務局へ御連絡下さい。
（踊る方、見る方、飲食する方大歓迎です。）

●大久保　婦久子　展

東京会場
会期　平成６年８月11日(木)～16日(火)
会場　東京・大丸
　　ミュージアムTOKYO12階
　　TEL.03-3212-8011

京都会場
会期　平成６年９月１日(木)～13日(火)
会場　京都・大丸
　　ミュージアムKYOTO６階
　　TEL.075-211-8111
主催　読売新聞社
入場料　一般700円、大学・高校生500円、中・小学生300円

発行：社団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax　03-3457-1598
〒108　東京都港区芝5-26-20
　　建築会館6F
振替：東京 1-365085
編集：広報担当理事 柳澤孝彦
（社）日本建築美術工芸協会 広報委員会
玉見　満（委員長）、大多了介、北村孝昭
坂上みつ子、崎山小夜子、高部多恵子
冨田俊男
制作協力：㈱SP建材エージェンシー

大型陶板 OTセラミック

600×600〜900mm

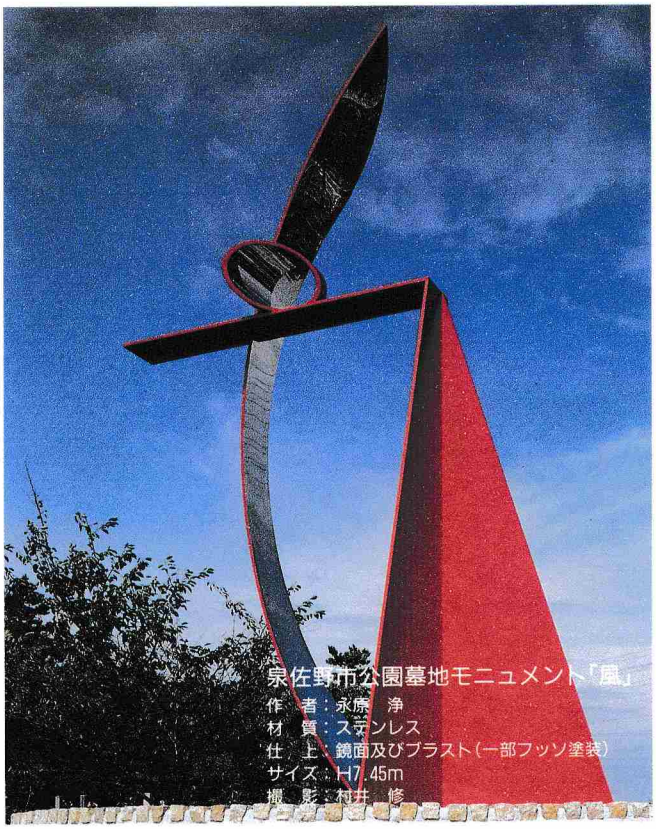
・陶板の無限の色とテクスチャーの可能性
・信頼性の高い乾式金物施工法
・材質・工法を含めたトータルな経年高品質の維持

施工データ

白樺ビル
設　　計 連合設計社市谷建築事務所
施　　工 清水建設㈱
OTセラミック 602.50×787.75mm
施工面積 2,650㎡
施 工 法 PC板クランプ工法

OT. CERAMIC
Human Space Communication

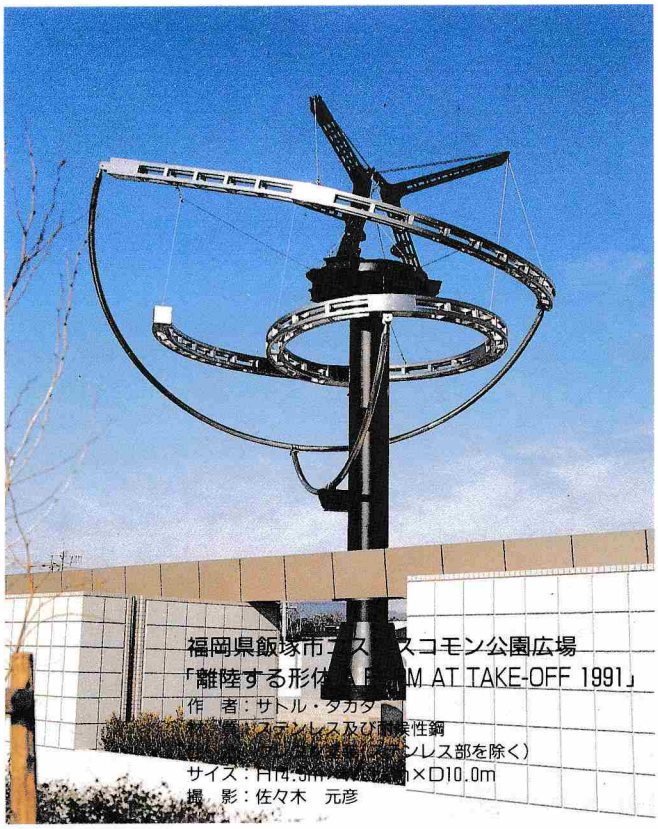
大塚オーミ陶業株式会社
東京／〒101 東京都千代田区神田司町2-6 TEL.03-5295-3555 FAX.03-5295-3556
大阪／〒540 大阪市中央区大手通3-2-21 TEL.06-943-6695 FAX.06-943-6487



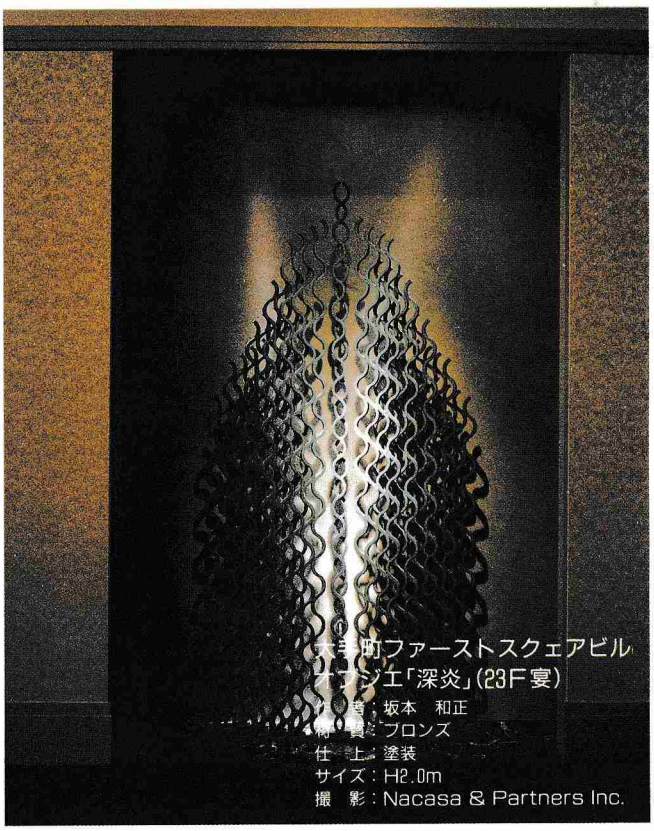
泉佐野市公園墓地モニュメント「風」
作　者：永原　浄
材　質：ステンレス
仕　上：鏡面及びブラスト（一部フッソ塗装）
サイズ：H7.45m
撮　影：村井　修

上尾市新市庁舎市民ホール
吊り彫刻「光彩」
作　者：多田　美波
材　質：チタニウム
仕　上：発色

メタルで、21世紀の都市空間に美を創造する。



福岡県飯塚市フ[illegible]スコモン公園広場
「離陸する形体[illegible]M AT TAKE-OFF 1991」
作　者：サトル・タカタ
[illegible]ステンレス及び耐候性鋼
[illegible]ンレス部を除く）
サイズ：H14.5m[illegible]×D10.0m
撮　影：佐々木　元彦



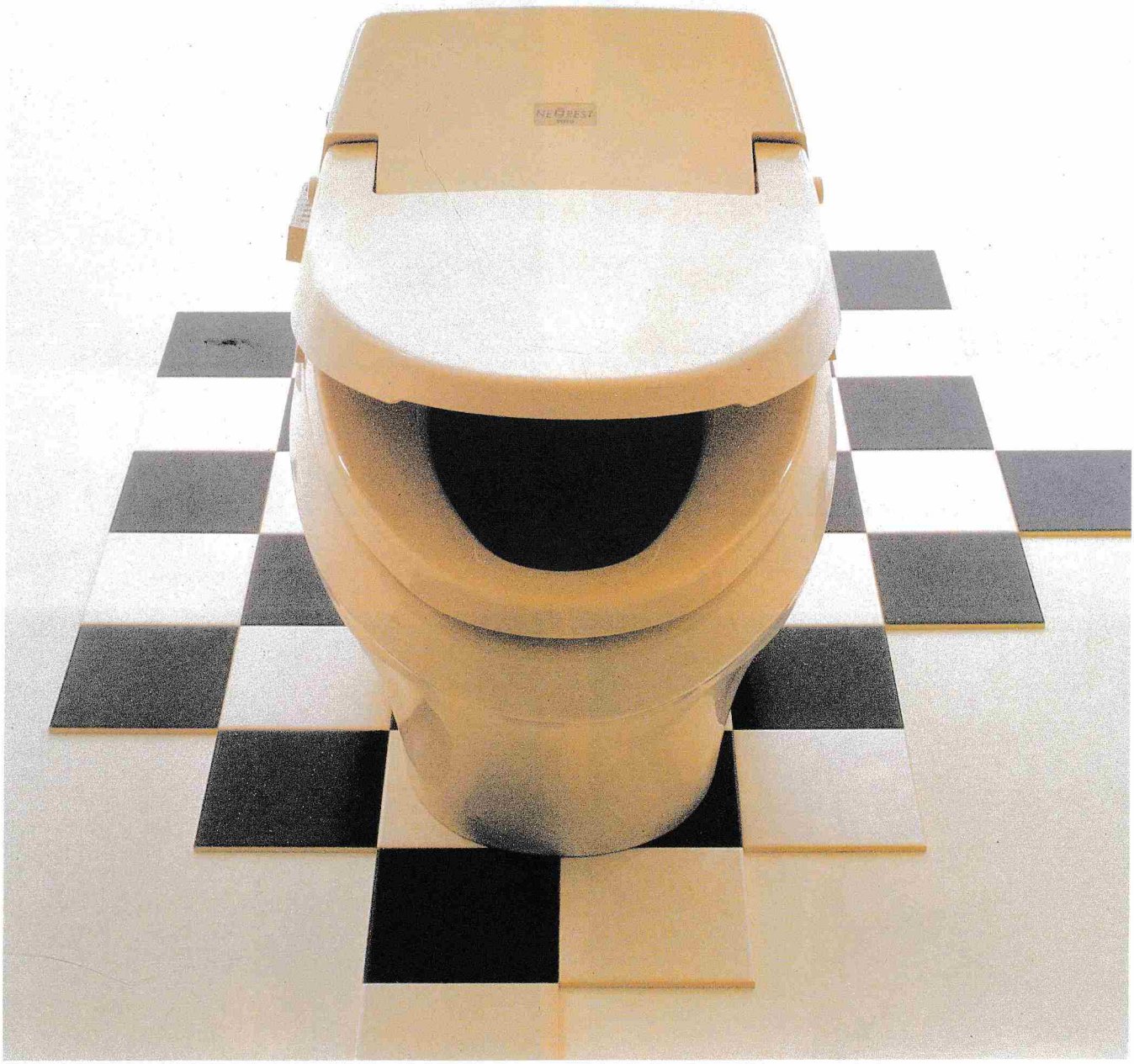
大手町ファーストスクェアビル
オブジェ「深炎」（23F宴）
作　者：坂本　和正
材　質：ブロンズ
仕　上：塗装
サイズ：H2.0m
撮　影：Nacasa & Partners Inc.

METAL ARCHITECT
KIKUKAWA

菊川工業株式会社　本社　〒130 東京都墨田区菊川2-18-10 TEL03-3634-3231（代表）

「一等賞の便器」

と注文されたら、わたしたちTOTOの中では、このネオレストEXをおすすめします。



一等賞の理由

①タンクのいらない水道直結タンクレス便器。「新洗浄方式(シーケンシャルバルブ方式)」の開発で、水道管と便器を直接つなげることに成功。タンクに水を貯める必要がないので連続して流せるうえに、給水管もなく静か。1度に使う水の量も、40%程節水できます。②トイレ空間を広く使えるローシルエット便器。タンクがない分、トイレはスッキリ。収納や窓が広く、大きく、タップリととれる訳です。③使い勝手がとてもいい多機能一体型便器。ウォシュレット機能をはじめ、オゾン脱臭や室内暖房機能も装備。操作はじつに簡単です。

※カタログご希望の方は、住所・氏名・電話番号を記入の上
〒107 東京都港区赤坂7-3-37 東陶機器株式会社 広告宣伝部「EX-1」係までご請求下さい。

NEORREST
(ネオレストEX)
TOTO